

EDUCATION

教育サテライトワークショップに参加して

愛知医科大学医学部 IR 室/生理学講座 佐藤 麻紀

今回、2019年3月27日から28日にかけて神戸国際会議場で開催された「FAOPS2019 & ADInstruments 教育サテライトワークショップ」に参加しました。「Blossoming the Future of Active Learners」(花ひらけ! アクティブラーナーその未来)を学術テーマとして、2日間にわたって、教育講演、ワークショップ、ランションセミナー、シンポジウム、ポスター発表が行われ、熱い議論がなされました。

ワークショップは5つあり、トピックとしては、「Using Clinical Cases for Physiology Teaching」, 「To flip or not flip the Physiology class?」, 「Translating active learning pedagogy to practice」, 「Integration of ICT teaching/learning physiology」, 「Integrating Research in Undergraduate Medical Curriculum」でした。ワークショップ形式ですので、グループに分かれて、議論しました。私自身、これまでこのような教育ワークショップに参加したことはなく、グループワークも不慣れだったと思います。

Workshop5の「Integrating Research in Undergraduate Medical Curriculum」についてご紹介します。このワークショップは7~8人くらいのグループになり、医学部における基礎研究についてのプログラムを立案しました。模造紙に目的、対象となる学生、人数、どのようにしてカリキュラムを組むのかなど、一例を作成しました。ある一定期間において、基礎医学に配属させ、研究を行わせることで、科学的探究心を養うことを目的としています。対象となる人数や教員の配置、場所など問題点など抽出し、議論しました。どの国においても、一定期間の基礎研究を行わせ、学生に



ワークショップの様子 (著者: 奥中央)

研究マインドを涵養させるプログラムは行っているようで比較的議論しやすい内容だったと思います。最後はグループでの発表を行い、短い時間ではありますが、国際間のグループワークを行えたと思います。このようなワークショップによって、短時間で課題を抽出できると感じました。しかし、ワークショップに慣れてないため、どのようにして議論に入ったらいいのか、どのようにしてまとめたらいいのか、みな意見を反映させるにはどうしたらいいのかなど短時間でまとめるにあたって、難しさを感じました。諸外国の参加者の意見に圧倒されることもありました。日本人は、アジアの中でも自分の意見を主張することは、諸外国に比べて、苦手なのかもしれません。

現在、医学教育カリキュラムにおいては、臨床実習を72週にするために、座学の前倒しが行われ

ています。こうした状況下においても、研究マインドを涵養することは重要であり、諸外国においてもカリキュラムとして組み込まれていることが分かりました。基礎研究の裾野を広げ、若い世代の学生が基礎研究に興味をもってもらえる取り組みを継続する事が欠かせないと感じました。

今回の国際教育サテライトワークショップに実行委員としても、初めて参加させていただき大変

よい経験となりました。事前打合わせはウェブ会議で行い、とても新鮮でした。今後、このようなツールを使った会議が増えていくのかもしれませんが、実行委員として加わることにお声がけいただきました藤田医科大学の中島昭先生はじめ、一緒に仕事をさせていただきました実行委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

「教育のページ」は学部学生，大学院生，ポスドク，教員などを対象に，生理学教育に関する取り組みや意見を紹介することを目的としています。原稿は Web（日本生理学会ホームページ）上にも掲載されます。皆様のご投稿をお待ちしています。投稿規程は http://physiology.jp/magazine/contribution_rule/ をご参照ください。